竹中 チャレンジドという言葉一つでも、チャレンジド自身が言う時、親や企業の人、政治家が言う時、それぞれ意味が微妙に違います。でも、人は意味が食い違ったまま会話していることが多い。

それをいかに翻訳し、人と人とを繋げて、よりよいもの、新しいものを生んでいくか。その力はこれからも磨いていきたいですね。

だから私は、本来、リーダータイプではなくて、徹底したコーディネータータイプなんですよ。

髙橋 いや、ナミねえはリーダータイプに見えますけど（笑）。

竹中 まあ、私は風呂敷を広げまくるから、そう見えるだけ（笑）。

日本は生き生きとした国になれるチャンスにある

竹中 私、自分がワルやったから分かるんやけど、昔はいくらワルやってもまた元に戻れる、正道に戻れるチャンスがいくらでもあったんです。でも、いまは一度道を踏み外したら、もう戻るチャンスがないような気がするのよね。

髙橋 確かにそうですよね。

竹中 私のところに相談に来られる人は素直ないい人が多くて、世の中に合わせられない、はみ出してしまった自分が悪いんじゃないかと自分を責めているんです。それは、いまの世の中にはこう生きなければならないという正しい道があって、多くの人がその道を必ず歩かなければだめだと思い込んでいるからだと思うんですね。

ただ、誰がその道を正しいと決めたのって話ですよ。そういう疑問を持てない時に人は精神的に弱ってしまう。だから、私はあえて自分が道を踏み外すことで、「一億総不良化」を狙っていこうかと（笑）。

髙橋 一億総不良化（笑）。

竹中 やっぱり、いろんな人が生き生きして、躍動感を持って生きていける社会にしていくには、時には皆が正しいということを疑う、道を外れることを怖がってはいけない。そうでなければ、本当の意味での「気韻生動（きいんせいどう）」にはならないんじゃないかと。

髙橋 ナミねえはまさにその存在そのものが気韻生動ですよね（笑）。

それで、私もナミねえと考え方は一緒なんですけど、いま理化学研究所で百年後の未来を考えるプロジェクトができていて、例えば、百年後の医療はどうなっているかを考えているんですね。

竹中 百年後、ですか。

髙橋 ええ、百年後の日本はいま以上の超高齢化社会になっていますから、目が見えない、耳が聞こえないなど、体の調子がよくない人が当たり前になると。そうなると、健康でなければならないという固定観念や、誰が障がい者でそうじゃないかという違いからも皆が解き放たれますから、いろんな人が自分らしく生きられる、本当にインクルーシブ（包括的）な社会になる可能性があります。見方によっては、超高齢化社会の日本は真のインクルーシブな社会になるチャンスだとも言えるんです。

あるいは、再生医療の進歩によって、早めに取り替えるとそもそも病気にならなくなるという方向に向かっていくかもしれません。

竹中 そうそう。日本はこれからチャンスなんですよね。人類は不可能に挑戦して、それを克服、解決していくことで発展してきたと思うんやけど、困難にこそ発展の種があるに決まっているんですよ。なんで皆、困難をネガティブに見るのか不思議でしょうがない。

そもそも私がこの活動に取り組んできた原動力の一つには、母親として、「娘をこのまま残して死なれへん！」という思いがあります。

おかげさまで、娘の麻紀は今年四十六歳になるんですが、いまも私を「お母ちゃん」と理解できないし、ベイビィタイプなので、生きることすべてを誰かに支えてもらわないと生きられません。その支えてもらわざるを得ない人をどれだけ守っていける社会にできるか。これは私に残された究極の課題であり、「おかんナミねぇの最大の我儘」でもあるので、これからもその解決のためにできる限りのことに取り組んでいきたいですね。

髙橋 私はいま再生医療に限らず、患者さんの生活をよくする、人を幸せにしていくために、新しいことに挑戦していくのが楽しくて仕方がないんですね。その生き生きとした思いを持って、これからも自分に与えられた使命に全力を尽くしていきたいと思っています。